

問答ふたつ

三木 紀人

一

後に兼好の名で知られることになる少年が、ある日、仏とはいかなるものかと父にたずねた。『徒然草』最終段の語る思い出で、八歳の時のことと明記されている。

父は当時の常識であった成仏思想にもとづいて

仏には、人の成りたるなり。

と答え、人はどうして仏となれるのかという第二問には、仏の教えによってなるのだと答えた。すでに物事を理づめに考えはじめていたらしい兼好は、この答えに納得できない。最初に法を説いた第一の仏は先立つ仏がまだ存在していなかったはずなのになぜ仏になりえたのかとただすと、返答に窮した父は

空よりや降りけん、土よりや湧きけん。

と言って笑った。古語の「笑ふ」は音声を伴う笑いについてのみ用いる。つまり、父は力なくが笑いなどをしたわけではなく、愉快そうに声を立てて笑ったのである。自分に答えきれない問いを発したわが子の成長がよほどうれしかったのか、彼はその後この事を人々に語って興じたという。

しかし、何やら不得要領な思いの中に残り残された兼好の思いはどんなものだったであろうか。先頃亡くなった歌人上田三四二氏の説によると、この思い出は、兼好が始めて死の恐怖に襲われた時のことではなかったかとされる。その恐怖をなだめてくれるのは、仏以外にない。そう聞いた彼が、仏がはたして信じられる存在かどうかをたしかめたかったというのである。あまりかえりみられていない説だが、私は大いに共感を覚えている。おそらく、幼い兼好は死の不安を語ろうとして、直接それにふれる勇気が持てず、形を変えた問いにしたために肝心のテーマがうやむやになってしまったのである。幼少の者と大人の問答にはこの種のやりとりが多いように思われる。

くりかえしになるが、この出来事を回想するのは『徒然草』の最終段である。兼好は有名な序段で、執筆に至る自分の内面外面を手短かに述べている。それに対応してこれは、跋文の意義を持ち、いわば、自己表現の彼なりの総括を試みたのであろう。自分は昔、このような疑問にとらわれ、いままも事態は大して変わらない。仏なるものへの理解も信仰もはかばかしく持てぬまま、形は仏者のごとくよそおって生きている。兼好が遁世者の身で

ありながら形どおりの法名なども持たず、「つれづれ」のあまりによかれあしかれ自由な作品を書かないでいられたのは、この問答あたりに発端があったのかもしれない。彼は何の感想もまじえずに淡々と語りながら、この段でさりげなくそんなことを暗示しているようでもある。

二

一方、フランスのカトリック作家ジュリアン・グリーンも、自伝小説『夜明け前の出発』によると、兼好の仏に対するのと似た神への疑問を持って、神はいつから存在するかと問うたことがある。年齢は六歳とやや早く、相手は、神を敬虔に信ずる母であった。この母は子の問いを真正面から引き受け、すべての前からすべての後まで存在しつづける神の超越性と絶対性を説く。そのことにふれつつ永遠とか無限といった観念の一端を知ったグリーンは、この時の感動を次のように記している。

いまでも記憶にある私をおびえさせた一種の荒々しきで、真実が私の心のなかに踏み入ってきたのだった。その感動は、あまりに強く激しかった。そのため、以後私に神に関して抱き得たあらゆる考えに、その痕跡が残りさえした。（講談社版、品田一良

訳による）

三

この二人の少年のケースは、それほど特異なものではあるまい（兼好の八歳などは、むしろ遅い方かとさえ思われる）。日本人の場合、仏や神そのものが主題とされるのは少ないにしても、生死とか性など根源的なことへの素朴な疑問の芽生えは、幼児期にすでに始まっていることが多く、それが、いつ、どのような形の問いになって大人に向けられるかわからない。そして、発せられた問いへの大人の応じ方は、その幼児の未来を少なからず方向付けることもある。

幼児教育にたずさわる人は、そんな緊張をゆたかにはらんだ世界に日々あることになる。その立場をしなやかに生きておられる方々の苦勞と力量はいかばかりのものであるか、などと想像することがある

（お茶の水女子大学附属幼稚園園長）

